

浪江の



こころ通信

・第31号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

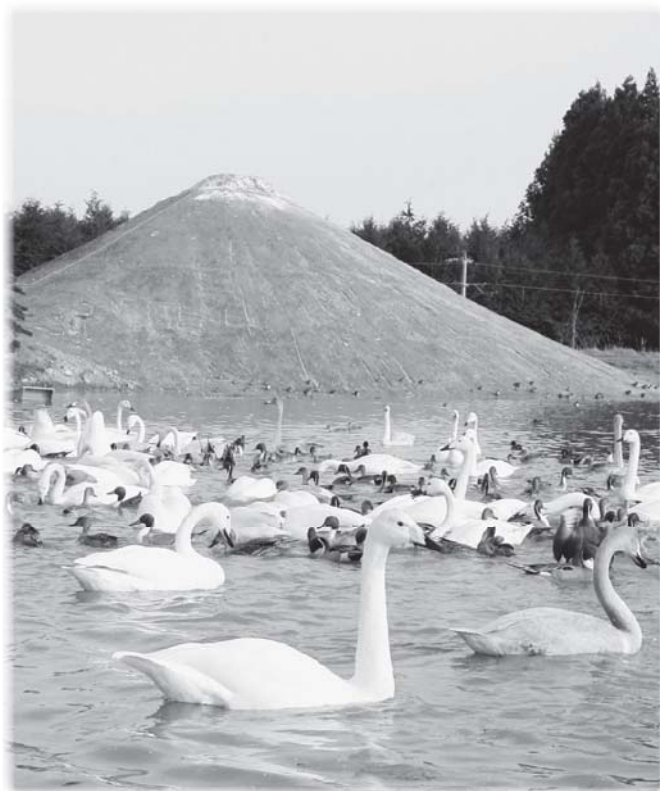
再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から2年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第31号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





国分 勝さん(酒田)

取材者：浪江町役場 嶋原
取材日：12月3日

いつもチャレンジャーでいたい

浪江で建築板金業を営んでいらした国分さんは、震災後、仮設住宅の建築などに携わり、現在は役場二本松事務所の生活支援課で臨時職員として勤務されています。以前とは全く違うお仕事ですが、“今までやってきてない事を新たなチャレンジだと考えて楽しんでいます。常にチャレンジャーでいたいですね。”と、毎日元気な声で親しみやすい電話対応を心がけていらっしゃいます。



▲仕事の様子 (役場二本松事務所にて)

震災が起こった時は、作業場のある幾世橋の実家に仕事の材料を取りに行っていました。作業場は地震の影響で物が散乱しましたが誰も怪我はありませんでした。子どもたちも無事で、両親と一緒に電気と井戸水が使える酒田の自宅で2日間過ごしました。13日に弟のいる小高へ避難し、水素爆発の翌日に二本松市にあるJICAの研修施設に移動して3カ月程いました。その後、2次避難所を経て震災

の年の8月から二本松の借上げ住宅で暮らしています。浪江では、色々な人と関わりを持ちながら建築板金業をしていました。その繋がりで浪江の建築組合から仮設住宅を建てるのに力を貸してほしいと依頼がありました。数百棟の仮設住宅に係わりました。福島県の仮設住宅はあらかた回りましたが、初めの桑折仮設には朝5時に起きて二本松から1時間半かけて通っていました。その時は大変だという気持ちではなく、“とにかく建てなきゃいけない。仮設を建てるのが第一優先だ”という意気込みでやっていました。その後、教育委員会から浪江・浪中を再開したいので1カ月で何とかして欲しいと言われて、12人の仲間と夏休みが終わるまでに使えるように準備をしました。廃校になっていた校舎だったので、子どもたちに気持ちよく学校生活を送ってもらえるようにみんなで力を合わせて頑張りました。その仕事も終わり、役場の臨時職員として一時立ち入りの受付業務に就いたのは10月です。畑違いの仕事ではあり

ますが、その分、何をやるでも新鮮でチャレンジャーの気持ちで取り組んでいます。電話を受けていると、皆さんの様々な思いにふれる機会が多くあります。建築業をやっていたときに知り合った人と話す機会があったり、おじいちゃん、おばあちゃんの話の聞き役になることもありま。元々役場に勤めていたわけではないので、皆さんの立場も分かり、その視点に立って仕事をしたいと思っています。建築の仕事は、子どもの学校の転校を伴うので今始める事は難しいですが、何の仕事であっても子どもに親が働いている姿を見せていかなければいけないと考えています。子ども達は自分の張り合いで、いつでも子どもたちの一番の応援団で在りたいと思っています。悪いことを考えたら終わりのなので、常にやってやろうという心構えでいます。そうしないと人生がつまらなくな。皆さん、どんどん働いて元気にいきましよう！



鎌田理恵子さん(権現堂)

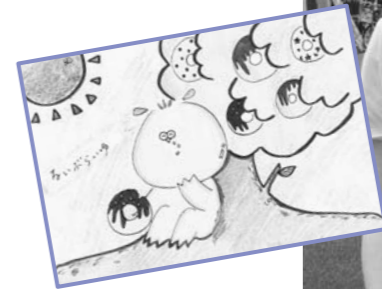
取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：12月5日

一緒にがんばろう！ というメッセージを歌で伝えたい

シンガーソングライター『理恵子』として、東京を拠点に、福島と東京でライブ活動を行っている理恵子さん。「父母や兄をはじめとする浪江の人たちの応援に元気をもらっている。音楽を通して、復興の後押しができれば」と活動を続けています。



▲Tシャツも作りました。



▲「るいぶらいゆ」
手書きの絵本の
表紙です。

私は、高校まで浪江町で暮らしていました。高校卒業の頃から、歌手になりたいという思いが強くなり両親に伝えるところ、「大学に進学し、資格を身に付けたら好きなことをしたいよ」と言われ、短大で栄養士の資格を取りました。東日本大震災の時は東京近辺で歌手としての修業中でした。自宅のテレビで、福島の状況が映し出されるのをどきどきしながら一人で見ていました。

父母がいきました。家族の安否が心配で、震災直後から、家族に電話をかけた続けましたが、家族全員の無事が確認できたのは、震災から約1週間ほど過ぎた頃でした。父は学校の先生、長兄は役場の職員、次兄は東京電力の協力会社に勤めています。次兄は、震災の時に、福島第一原子力発電所の4号機で働いていました。普段は15分で帰れる距離を6時間かけて帰ったとのこと。浪江での一番の思い出は『十日市』。一日目は友だちと、二日目は家族と、といった具合で三日間通いました。学校帰りに、友だちと行った文房具屋さん「ほていや」、「サンプラザ」や「スパーフジコシ」では、行くたびに必ずと言っていいほど、知り合いに会えました。カフェ「はるく」は人生初めてのアルバイト先、ケーキ作りの補助やホールのお手伝いをさせてもらったりしました。歌を始めて6年目になります。今は、オリジナルの曲を聴いてもらえるようになりました。震災以降は、東京をメインに時折福島へ。東京ではロック系の曲が、福島ではバラード系の曲が

好まれます。震災直後には、東京の人たちに福島の人たちの思いを伝えるため「311」という曲を作りました。福島の人たちからは「本当に歌詞の通りだ」と言われ、作って良かったと思っていました。元々は震災を経験されていない方々に福島を忘れないで頂けたらという想いで作った曲でした。最近できた曲「るいぶらいゆ」は、聴いた人たちが明るい気持ちになれると思って歌詞を考えました。今年の『十日市』で歌ったら子どもたちが、曲に合わせて楽しそうに踊ってくれて、うれしかったですね。一緒にキャラクターや絵本、Tシャツも作りました。震災から2年9カ月、東京の人たちの意識から震災は遠くなくなってきているように思います。一方で、被災者の人たちの多くは、暮らしの不安を抱えています。そのギャップに戸惑いを覚え、時に動いている人に出会うと、うれしくなります。これからも「頑張るって」ではなく「一緒にがんばろう！」というメッセージを歌で伝えていきたいと思っています。



菅野 裕美さん(南津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：12月7日

望みは、「落ち着いた暮らし」

現在、福島市の西部、吾妻連峰の麓に近い佐原仮設住宅にお住いの菅野さん。故郷の津島には月に1回帰れるようになったけれども、だんだん用事も少なくなってきたと話されていました。まもなく仮設住宅から復興住宅への移行時期が来ますが、お子さん方の進学もあり、福島市での次の暮らしを考えていらっしゃるとのこと。



▲佐原小学校跡地応急仮設住宅・集会所の前にて

■佐原は、故郷・津島に似ています
東日本大震災発生直後、家中のものが散乱しましたが、家そのものは大丈夫で、約1週間ほど家で生活していました。辺りの道は、津島の公民館や学校に避難する請戸周辺の海に近い人たちが町なかの人たちの車で大渋滞でした。
その後、浪江町が全町避難を呼びかけましたので、父や母、子どもたちを連れて岩代体育館に避難しました。そこに2週間ほどいた後、二次避難所となった福島市の土湯温泉に移動しました。4月～夏頃まで4、5カ月間避難生活をし、その後、仮設住宅が出来たことを役場から知らされて、子どもがいる家は

佐原が、しのぶ台かの選択でした。二次避難所も仮設住宅に入居する時も子どもたちが優先され、おかげで土湯温泉の時も佐原に移ってからも、荒井小学校と西信中学校に一貫して通うことが出来ました。
福島市の西部に位置する佐原は、市内に比べて雪もたくさん積もるし、風も強い。津島と同じような気候風土です。ここの良いところは静かなことです。反面、Aコープの移動販売があるものの、周りには店が少なく、車は必需品です。
この仮設には22世帯が住んでいます。震災以前に住んでいた地区はバラバラで、最初は大変でしたが、2年も過ぎると大分慣れてきたようです。
■佐原から転居する時期が近づいています
現在、自治会長を務めて2年目ですが、住民全員が気軽に挨拶を交わします。引きこもっている人は一人もいません。でも、後1年くらいで仮設住宅の耐年数の期限が来ますので、復興住宅などに転居することになります。既に先月は2軒、今月は1軒と、転居する家が増えていきます。
先月、入退院を繰り返していた父が亡くなりましたが、母は

元気で、元気がです。
下の子どもが福島市内の高校進学を希望していることや、後3年は最低でも帰町できないことがあり、私たち家族は福島市に残ることになります。
ただ、復興住宅は集合住宅でしようから、階上、階下に対する不安もあります。小さくてもいいから一戸建ての暮らしがしたいですね。
■町には、これからの暮らしの用途をはっきりと示して欲しいです
放射線量によって区域編成が変わり、津島には時折帰れるようになり、津島には人が住んでいない土地は草木で荒れ放題で、人影もありません。
今の技術では実現出来ないようですが、山の除染をしない限り、帰ることは無理なのではないかと私は思っています。故郷に戻りたいお年寄りがいても、帰る時期が10、20年後では、元通りに住むことに見切りをつける他ないような気がします。
町として早く対策を打ち出さないことには町民の帰町はないです。ましてや原発の廃炉には相当の時間がかかります。先の見通しがないと私たちは動きようがないことを、もったと考えたいと思っています。



石井 絹江さん(赤宇木)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：12月6日

皆さんが浪江に戻りたくなる環境づくりの一助になりたい

～ふるさとの力こそが私たちの心を支えてくれると信じて～

石井絹江さんは、震災後、阿武隈地域の伝統食を活かした「かーちゃんの力・プロジェクト」に参加し、仮設住宅に弁当を届けるなど、ふるさとの力を復興へと結びつける取り組みを続けてきている。石井さんのお話からは、必ず浪江に戻って復興させたいとの強い思いが伝わってくる。



かーちゃんの力・プロジェクトは、震災の年の10月頃から始まりました。復興に向けて自分たちができることはないかと思いついた女性たちとともに、栄養に配慮した健康弁当の配達などを進めてきました。今は、父の体調が悪くなり、そのお世話をするためにプロジェクトを離れましたが、まだまだ自分のできることはあると思っています。私は、役場職員として退職ま

で地域の皆さんに育てていただきました。だから50歳の頃から、町の産業振興に携わりながら、今度は支えていた皆さんの恩返しをしたいという思いがずっと強くありました。大震災前は、町内にできた5つの直売所を中心に、地域にある豊富な食材を掘り起こしながら、全国に発信する取り組みが軌道に乗りつつありました。直売所では、行者にんにく、ブルーベリー、りんどう、キノコ、かぼちゃ、饅頭、サケの燻製、そして菜種やツバキから搾った油など、地域の皆さんと様々な取り組みに挑戦してきました。大震災によって、すべては止まってしまいました。それが、それで培ってきた経験、そして何よりも地域の皆さんとのつながりは今も力強く生きています。今も、金谷川など福島市の周辺に農地を確保し、野菜などを作付けして、その灯を絶やさないよ

うにと頑張っています。
震災から2年半が過ぎて、それぞれの土地での生活が定着してきている方もいると思います。けれども、何か心の中にぽっかりと穴が開いている感じがします。やっぱり私は浪江に戻りたい。ふるさとが私たちの心を満たしてくれるはず。浪江に戻って、高齢の方々と一緒に畑を作りながら、浪江の美味しい食べ物を食べさせてあげたい。
将来、町への帰還が始まったなら、なるべく支え合って暮らせるように、公営住宅を整備したり、その周辺には皆で野菜を作ったり、草取りができるように農園を確保するなど、戻った人びとが生きがいを持って暮らせるまちづくりを進めていただきたいです。実際の作付け、できた野菜などを使っての食事作りや配食は、私たちに頑張らせてほしい。そうして浪江町にみんなが戻りたくなるような環境づくりに取り組みたい。それが今の私の願いです。私は浪江町が好きです。ふるさとの力こそが、私たちを支えてくれると信じてこれからも頑張っていきたいと思います。



かとう美容室 加藤喜志子さん(川添)

取材者：浪江町役場 舩田・嶋原
取材日：12月4日

美容室を憩いの場にしたい

『浪江のこころ通信』第12号掲載の加藤喜志子さんは、新潟からご主人と同じ二本松市の仮設住宅に引っ越され、12月12日に本宮市の恵向仮設住宅内で“かとう美容室”をオープンされました。「沢山のお客様に来ていただければ嬉しいですが、だれでも入ってきて話だけでもしてくれる憩いの場になったらいいな。」と、おっしゃいます。

震災の年の4月に生まれた孫が新潟にいますので、2年間はそばにいてあげようと思って、3人の孫たちの世話をしたり一緒に遊んだりしていました。浪江で美容室をやっている時は忙しかったので、のんびり過



▲娘さんたちと一緒に
後列左 長女 久保田寛美さん、
後列右 三女 渡邊直美さん

◀12月12日、オープン当日の様子

2年が過ぎてから、店を再開する情報を集めに役場へ行き、中小機構の仮設施設整備事業制度を知りました。そして、これなら出来ると思って、恵向仮設住宅自治会長の平本佳司さんをはじめ、仮設の皆さんのご理解をいただいて再開を決めました。仕事をしたいというだけでなく、3人の娘たちに自分の足跡を残しておかなければと思っただけです。初めはひとり店を始めるとも思いましたが、娘も心配してくれましたので美容師をしている下の娘に、「ケンカしながら一緒にやろうね。」と誘ったら、一緒にやってくれることになりました。わざわざ引っ越してく

れた娘夫婦に感謝ですね。上の娘も美容師なので、孫が大きくなったらいつか一緒にやりたいという夢もあります。オープンした12月12日は、浪江の“かとう美容室”が昭和63年に開店した記念の日です。いちに、いちに、と一歩ずつ進むように同じ日を選びました。恵向仮設住宅の中にあるお店なので、店づくりをいろいろ考えて、お年寄りに優しい美容室づくりとして、シャンプーもセットも移動なしで出来るようにしました。若い方にも喜んでもらえるように、パーマは最新の髪に優しいエアウエーブです。また、待っている間も終わってからもお茶のみの場としてゆっくりしてもらえればと、着付け室にはこたつを置いて待合室にしました。朝から晩まで居てもらってもいいです。皆さんの顔を見て話すのが本当に楽しみです。女の人が仕事を持っているのは大変ですが、幸せな事だと思うのでこれからも頑張っていきたいと思います。皆さん、どうぞ気軽に“かとう美容室”にお越しください。お会いするのを心待ちにしています。



熊谷 隆志さん(加倉)

取材者：NPO法人寺子屋方丈舎 江川
取材日：11月30日

人とのつながりが浪江の思い出、支え合う気持ちは忘れない

猪苗代は、もうそろそろ雪が積もる頃。根雪にはなりません取材の日も、雪がちらついていました。熊谷隆志さんは、今年の4月から猪苗代町役場上下水道課で働いています。



「もうだいぶ慣れたけれども、猪苗代の雪は始め大変だったね。でも、この人は親切で、避難生活の中で知り合いができて、ここに住むようになったんだよ」と、温和に語ってくれます。浪江町では、加倉地区に住みながら、双葉町で働いていました。震災の日は、大きな揺れに驚きましたが、三、四日ほど自宅で過ごしていました。家の壁はひび割れ、屋根が壊れる被害に遭ったといっています。

■「帰りたい思いは強く」
気にかかるのは、これからの事。「帰りたいのは山々だけれども、現状では無理だしね。これからどうするかも考えているけれど、いつ帰るといえるのはわ

家を出たら自衛隊の人に「避難してください」と声をかけられ、川俣町から二本松市、そして猪苗代町に避難をしてきました。■避難先の職場にも慣れて
「震災から3年近く経つけれど、あつという間だね。今でも、隣近所のつきあいがよかった浪江の生活を思い出すよ」「大変な事は多いけれど、この職場の人が良くしてくれるから。(猪苗代の)町長もわざわざ職場で働いているところに来て声をかけてくれるしね。」
現在の職場では、同じ浪江の人とも一緒に働いています。浄化槽の点検にも慣れ、データ入力の仕事もしているとか。やはり、猪苗代に来て浪江の同士がいると心強いと話します。

猪苗代に来たのは避難の経過での事。二次避難所が猪苗代のペンションであったことが「縁」になっていきます。自分でも何をすればいいのかわからなかった避難生活、さまざまな困難、新しく支えてくれる人との出会い。いま思えばどれも貴重なものと熊谷さんは語ってくれました。